

立教科目の誕生

—その多面的な背景を振り返る—

青木 康

2001年度に全学共通カリキュラム（以下、全カリ）の総合教育科目A群に「立教科目」が設けられ、開講5年目の2005年には立教科目を展開する取組みが文部科学省の「特色ある大学教育支援プログラム」に採択された。それが契機となって、立教科目の成立期が学内外であらためて話題にのぼることもあると思われる。そこで、本稿では、筆者が全カリ運営センター内でこの科目群の構想をまとめていく過程に立ち会ったときのことを思い出し、立教科目誕生の背景を多面的に考えてみたい。なお、筆者は当時全カリ運営センター内の役職に就いてはいたが、以下はあくまで筆者個人の見解であることをあらかじめお断りしておく。

1. 総合A群科目のカテゴリー別展開コマ数の調整

1999年度から全カリ運営センターの内部では、1997年実施の総合教育科目の見直し作業が開始された。その作業の結果まとめられた新たな総合教育科目が、池袋キャンパスでは2001年度から、武蔵野新座キャンパスでは2002年

度から展開された。この見直し作業においては、次節で述べるように、総合A群科目の内容面での改善ははかられたが、本節ではまず、その内容面での作業の前提ともなった総合A群科目の展開コマ数という数量面の問題を見ておきたい。

実際、この時の見直し作業の重要な検討課題のひとつは、総合A群に設けられていた6つのカテゴリー（「思想・文化」「歴史・社会」「芸術・文学」「環境・人間」「生命・物質・宇宙」「数理」）ごとに授業1コマあたりの履修者数が大きく異なるという問題であった。一般的に言って、カリキュラム上対等な位置付けになっている総合A群科目の履修者数がカテゴリーごとに大きく違っているというのは問題であるので、履修者が多い分野の展開コマ数を増やし、履修者の少ない分野の展開コマ数を減らすという対応がとられることになった。しかしながら、総合A群は、学生が広い視野をもてるようにすることを目標とするだけに、履修希望の学生が多いから、その分野の展開コマ数を増やして対応するというだけ

では不十分と言わざるをえない。

以上のような考慮もあって、2001年度からの総合A群のなかには、内部的に「定常科目」と呼ぶ科目の他に、展開コマ数では「定常科目」の数分の1に過ぎないものの、もうひとつ別のジャンルの科目が設けられることになった。そして、前者については履修者数実績を参照してカテゴリーごとの展開コマ数を決める一方、後者については内容本意の展開を構想した。立教科目は、この内容本意の展開をする部分に置かれている。

2. 多彩な科目

総合A群の一角をしめるものとして2001年度から導入された新しいジャンルの科目は、「多彩な科目」と呼ばれることになった。「多彩な科目」はさらに二分され、一方が「立教科目」、もう一方が「時事科目」と名付けられた。前節では、「多彩な科目」の成立を総合A群科目におけるカテゴリー別の展開コマ数の調整という面に関連づけて説明したが、1997年度実施の総合A群科目の見直し作業では、より内容にそくした検討もなされていたことは言うまでもない。

全カリが出発した1997年度の総合A群科目は、「経済学」とか「物理学」といった学問分野名そのままの名称をもった科目が並んでいた旧一般教育科目に較べると、「企業と社会」とか「地球の科学」というように、より具

体的にその科目の主題を示す名称を付すなど、学生が自覚的に問題意識をもって自分の履修科目を組み立てていける工夫を行っていた。しかし、現実の学生の総合A群科目の履修のし方は、そうしたカリキュラム作成者の意図と期待に必ずしも十分に応えるものとならず、学生の側にも教員の側にも、総合A群科目の内容面でのいっそうの工夫と改善を期待する空気が出てきていた。確かに、長年にわたって維持されてきた旧一般教育科目の科目展開と、それを前提にした学生の教養科目履修のスタイルとが、1997年度の全カリ実施という1回のカリキュラム改革で一新されると期待すること自体に無理があったのであり、全カリ運営センターでは、1997年度に始まったカリキュラムが満4年を経過する2001年度からの実施を目的に、1999年度には内容面を含む総合A群科目の見直し作業を開始したのである。

総合A群科目の内容面での改善を検討するなかで、大学が自らの特色を社会との関係において意識し、それをカリキュラムの上でも明示的に示すことが、学生からも、また社会一般からも求められるようになってきているという認識の共有が進んだように思われる。そこから具体的な課題として意識のぼってきたのが、「カリキュラムの中に立教らしさを出すことと、カリキュラムを現代化すること」(注)の2点であった。「多彩な科目」はこれら2

点の課題に直接応えようと設けられた科目群であり、それを構成する「立教科目」と「時事科目」はそれぞれ第1の課題と第2の課題にかかわるものであった。

このように、立教科目と時事科目は双子の関係にあり、共通する面が多い。立教らしさを表現する立教科目が、立教大学が伝統的に大切にし、今後も重視するであろうテーマ（発足時には、宗教、人権、大学、都市の4テーマ）をとりあげ、従って相対的に継続的な科目展開を前提としているのに対して、急速に変貌する現代社会の時事的なトピックをとりあげる時事科目では、個々の科目は短い期間で（具体的には2年程度で）交替していくという違いは確かにある。しかし、両科目群は、現代社会に生きる人間として考えなければならない重要な問題は何かの点かという点について、大学が一步踏み出して学生や社会にその考えを提示するという点では共通していると言えよう。

3. 履修ガイド

立教大学の学生は、一般に卒業までに総合A群科目から数科目ないし10科目程度を選んで履修することになるが、多彩な科目を構想する過程においては、学生が自分なりの問題意識をもって科目選択を行えるよう支援するという役割が明らかに期待されていたと思われる。この役割は1997年度実施の総合A群科目の準備過程でも意識されていた

が、その強化が求められたのである。多彩な科目はその個々の科目内容によって適切と思われる所属カテゴリーが決定されたので、全体として見ると、立教科目も時事科目も総合A群の複数のカテゴリーに分散して配置されている。その結果、例えば、都市というテーマに関心をひかれた学生は、都市にかかわる立教科目を中心に総合A群科目の履修科目を選択していくことで、複数カテゴリーにまたがる、しかし関連性のある総合的な履修へと誘われるのである。

多彩な科目の実施準備の過程では、上述の役割に適した履修要項上での表記のし方なども話題になった。総合A群科目の一覧表などで、これらの科目をどう目立たせるかということで、立教科目を略してR科目、時事科目を略してT科目とし、科目表ではそれぞれRまたはTの記号を付すこととした。話合いのなかで、レストランのメニューでシェフのお勧め料理のところにRのマークを付けて目立たせている例を挙げて、そんな提案をしたことや、最初は時事科目の略号はJにしようと考えていたものの、Jリーグなどの類推から日本関連科目と誤解されかねないということで、時（time）との関連でTに変更したことなどが思い出される。内容面でいかにすぐれた科目を提供したとしても、学生に履修してもらわなければ無駄になってしまうので、こうした配慮は細かいことではあるが、重

要と思われる。

4. 授業方法の工夫

一般にカリキュラム改革において科目を新設する場合、その科目がしっかりとした内容をもっていることがまず前提であるが、授業方法の面で目に見える改善が合わせてなされることも重要であろう。1997年度以来、全カリの総合B群科目は高い評価を得てきていると思われるが、その成功の理由のひとつは、1コマの授業に兼任講師コマを3つ使うという明快なルールを科目発足に合わせて導入したことであったと考えられる。2001年度に立教科目と時事科目が新設された際にも、それを支える授業方法上の新しい試みが同時に導入された。それが、現在では全学的な制度となっているゲスト・スピーカー制度で、これにより立教科目がより魅力的なものになったことは明らかである。

立教科目と時事科目では、総合B群科目と異なり、科目担当教員は1人であるが、ゲスト・スピーカー制度により、特定の回の授業に、それぞれのテーマにふさわしい学外の専門家や現場を経験している人々をゲストに招き、担当教員とは異なる視点に立った議論をしてもらうことができる。このアイデアを話し合っている過程では、ゲスト・スピーカー制度を上手に使える、複数の担当教員が異なる立場から問題を論じ合う総合B群科目に近い内容を、そ

れよりもずっと簡便な形で、ということは、より多くのテーマについて実現できるのではないかといった意見もあり、そうした形を関係者の間では「ひとりB」と呼んでいた。2001年度以降、この「ひとりB」がどの程度うまく実現したのかは分からないが、ゲスト・スピーカー制度を利用する「多彩な科目」にそうしたねらいが秘められていたことは紹介しておきたい。

おわりに

以上述べてきたように、「立教科目」誕生の背景には複数の要素がある。筆者の視野に入っていないさらに別の要素もあるかもしれない。そのことは、立教科目がそれだけ多くの関係者の協力によって、また、そうした人々のさまざまな期待を背負って誕生したことを意味する。それら複数の要素のうち、ある要素が、その後の展開のなかでいっそう強め発展させられ、また、別の要素は相対的に意味を失い忘れられていくということはあるであろう。ただ、この立教科目の展開という教学上重要な取組みを歴史的に評価するにあたっては、一度、そのような、現在は目立たなくなった要素にも注意をはらった点検作業を行うことが有益なのではないだろうか。

(注)『全カリニューズレター』No. 15に掲載された藤原新「『多彩な科目』スタート」から引用。本稿の執筆にあたっては、同氏のこの文章を参考にす

る部分が多かった。

あおき やすし

(本学文学部教授,
1999年度全カリ運営センター専門委員,
2000年度全カリ運営センター特別教務委員)